

やすらぎ古民家カフェの
しあわせ時間

あやかさんと、ほっと一息

家野ね子 Neko Ieno



アルファボリス文庫

目次

第一章	「矢狭間」 やはざま	5
第二章	「あやかしの街」	37
第三章	「飢えの祠」 はぐいすのほ	73
第四章	「逢魔のお客様」 おうま	100
第五章	「ミシミシとギシギシ」	155
第六章	「お盆の渡し舟」	167
第七章	「湖畔の人」	248

第一章 「矢狭間」^{やはざま}

特急列車が駅に滑り込み、うとうとしていた意識が浮上する。長距離移動で固まった体を伸ばしつつ、荷物をまとめて駅に降りた。

長野県松本市^{まつもと}、古い城下町であるこの街には、からりと乾いた風が気持ちよく吹いていた。

駅前には、スーツケースを引いている様々な国からの旅行者が忙しく歩いている。かくいう私、嬉野^{うれしの}あずみも、その旅行者の一人。

とは言っても、楽しい楽しい一人旅、というわけではない。

ことの起こりは一週間前、家に帰ると、婚約者が浮気相手と一緒に私のベッドでくんずほぐれつしていた。

同じ会社の同僚であり、結婚の報告も会社にしていたというのに、この仕打ちはない。り得ない。

ブチギレたままその足で同棲していた家を引き払い、マンスリーマンションに引越

しをした。会社に婚約を伝えていたせいで職場にも居づらくなって、退職願を提出し、私は落ち着ける家も職場も一度に失う形になってしまった。

少し感情的に動きすぎたかな、とは思う。けれど、初めてできた彼氏でもあり、結婚の約束をしていた相手でもあるのだ。

そりゃあ、我を失っても仕方ないというものだろう。

ヤケクソのまま、溜め込んだ貯金を使って、私はかねて訪れたかった温泉宿に向かうことにしたのだ。

がらがらと無駄に大きなキャリーケースを転がしながら、宿につながるバスに乗り込む。

その時、目の前をすうっと透明な人間が横切った。

——!?　　なんで、また幽霊が。

そう、「また」だ。

私は昔から幽霊やあやかしが視_みえる。そのせいで随分と苦勞してきたものだ。元婚約者の康平_{こうへい}と付き合っていた頃は、何故か視えなくなっていたのだけど……。もしかして、異性と付き合っていると視えなくなるとか、そういう法則でもあったのだろうか。

「はあ……」

康平に浮気されて、職も失った挙句、何かと煩わしいこの「力」まで戻ってきてしまうなんて。あまりにも踏_ふんだり蹴_くったりだ。

窓にもたれながらため息を吐くと、外でしつぽが先割れスプーンのように中途半端に分かれた猫が、二本足で立っているのが視えた。

猫又、かな。

幽霊にあやかし。さつきから何体もチラチラと目の端に映る。

この松本市が特別なのか、それとも私が変わってしまったのか。どちらにせよ、せっかくの旅行なのに暗澹_{あんたん}たる気持ちで宿へ向かう。

ブックストアやペーカリーが併設された複合施設でもある宿は、老舗_{しにせ}旅館を改装して出来上がったもので、モダンでありながらも和の心溢れる落ち着いた空間になっていた。

せっかくなら、楽しまなきゃ損よね。無理やり気持ちを立て直し、到着して早々、私は荷物の開梱作業もおざりに、温泉へと向かった。

まだ夕方で、入っている人は数少ない。

「ふうう」

体をざっと流して、檜_{ひのき}の湯船に浸_{ひた}かる。

大きな窓からは青々とした日本庭園が広がっていて、非日常感にどっぷりと浸ることができた。

大きく深呼吸をすると、鼻腔を木の爽やかな香りが通り抜ける。

鼻腔

怒りと悲しみでぐちゃぐちゃになった体を整えるように、呼吸を繰り返す。

露天風呂に出ればまだ早春の涼しい風が吹き抜け、お風呂で温まった体を程よく冷やしてくれる。

空を見上げれば、夕暮れの橙色に染まった雲がたなびいている。

東京からの長距離移動で疲れた体が程よくほぐれたところで、温泉を出て、次は夕食だ。

部屋に戻るとちょうど仲居さんが訪室してきたところで、夕食の配膳を丁寧にくれた。

山菜の天ぷらに、お刺身の盛り合わせ、出汁のきいたあたたかな湯豆腐。菜の花のおひたしに、鹿肉のローストまで出てきた。

天ぷらは爽やかな苦味が心地よく、椿油で揚げているとかで、からりと軽い食感だった。

やまあい

山間の松本市だけれど、お刺身も新鮮で、ほかほかのご飯にのせると、いくらでも

食べてしまいそう。

お酒だって進んじゃう。

頼んだのは、長野の地酒の生原酒。長野にゆかりのある島崎藤村にちなんだこのお酒は、生酒だけあってお米の風味が濃厚でありながらみずみずしく、透明感のある味わい。喉をするすると通ってしまう。

「はあ……。なんでこんなことになっちゃったかなあ」

部屋で一人、浴衣を着てご飯を食べていると、どうしたって色々考えてしまう。

「結婚間近で浮気されるほど、私ってどうでもいい女だったのかしら」

豊の匂いも美味しいご飯も、今の私の心を癒やしきるには力不足だ。温泉で緩んだ体と、お酒の影響だろうか、怒りに支配されていた心の奥から、悲しみが湧き上がってきた。

ないがしろ

蔑ろにされていた。

裏切っても構わない程度の存在と思われていた。

その事実が自尊心を容赦なく削ってくる。恋人の存在に自分のアイデンティティを委ねるほど幼いつもりはないけれど、結婚まで考えていた相手にはそれなりに自分の存在意義を委ねてしまっていたらしい。

「あんなやつ！……あんな、やつ」

康平と出会い、この世ならざるものが視えなくなつて、普通の女の子になつたみたいで楽しかった。そんな日々の思い出が、容赦なく脳裏に浮かび上がってくる。ふつ、ふつと泡のように浮かび上がっては弾けていく記憶に心を削られて、静かに涙が溢れてきた。

「ふ……うう……」

泣いたつて現実が変わるわけじゃない。前を見なければ。今の私は職なし家なし恋人なし、だ。特殊な力と反比例するように、現実主義に育った私の理性が囁くけれど、手綱を離れて暴れ狂う感情はどうしようもなく、その苦さを洗い流すように私はひたすらお酒を呷った。

「あつたま、痛あ」

二日酔いでガンガンと痛む頭を押さえながら、昨晚の自分を恨む。今日は思う存分観光しようと思つていたのに、これじゃ朝からは動けない。

不貞腐れて二度寝を決め込み、再度目が覚めた頃には太陽が天高く昇つていた。時計を見れば十二時半。さすがにそろそろ出かけよう。

いそいそと浴衣から私服に着替え、スマホと財布だけ持つて旅館を出る。目的地は定番中の定番、松本城だ。日本で唯一黒うるし仕上げの城というのは、どんなものだろうか。

バスに乗つて松本城まで出ると、放置していたお腹がぐう、と鳴った。

まずはお昼ご飯、食べるか。

松本城の程近くにあるお蕎麦屋さんに入ると、威勢のいい女将さんが迎えてくれた。カウンターに腰掛け、天ぷら蕎麦を注文してしばらくすると、ボリュームのある天ぷらと、十割蕎麦特有の濃い色合いの蕎麦が品よく盛られて出てきた。

蕎麦つゆは昆布の出汁がきいていて、蕎麦粉の香り高さに優しく寄り添っている。

「観光ですか？」

人懐っこそうな女将さんが、カウンターの奥から声をかけてきた。

「ええ、松本城に行こうと思つて」

「いいですねえ。今の時期は風が気持ちいいですよ。矢狭間からこう、すうつとね」

「やはざま？」

聞き慣れぬ言葉に私が首を傾げると、女将さんは親切に解説してくれた。矢狭間というのは、戦があつた時代、城の上から矢を射かけるために作られた隙間だそうだ。

なんだか物騒だけれど、今となつてはただ風の吹き抜ける隙間でしかない。そこから覗く景色も綺麗なのだそうで、楽しみに思いながら私は食事を完食し、店を出た。

職場を辞めて平日に飛び出してきたせいかな、観光客は比較的少ない。入城すると、年月を経て濃い飴色に染まった柱と床が出迎えてくれた。

順路に従つて、進んでいく。階段は非常に急峻で、昔の造り特有の不便さが逆に面白い。こういう雰囲気は結構好きだ。ずっと昔から変わらず在り続ける場所。こういうところにいるあやかしや幽霊は、落ち着いた雰囲気のものが多い。

と、思っていたのだが。

「あらら」

思わず声が出てしまい、周囲を気にして慌てて口を閉じる。目の前には、頭に葉っぱをせた化けたぬきが、他の観光客の鞆からお菓子をくすねていた。

化けたぬきは嬉しそうにお菓子の袋をバリバリと開けると、口の端にビスケットの粉を張り付かせながらいそいそもぐもぐとお菓子を食べている。

このまま進んで行けば、私は泥棒たぬきとぶつかってしまう。視えるということは、触れるということでもある。幽霊ならともかく、あやかしの類とは接触するリスクがあるのだ。

さてどうしたものか、と考えていると、矢狭間から強い風が吹いてきて、たぬきの頭にのつていた葉っぱをひゅうと攫つてしまった。

「あっ！」

たぬきが慌てた表情で葉っぱに手を伸ばすが、あえなく葉っぱは反対側の矢狭間から外へと吹き飛ばされてしまう。その時、ほん、と音を立てて、たぬきは化けた。

——大きな大きなサイズのためきに。

「うわああ……」

巨大になったたぬきは、一メートル四方程の階段の狭い吹き抜けに挟まってしまふ。「あちゃあ」

これじゃあ順路に沿って階段を登ろうにも、たぬきが詰まっついて登れない。私が困った顔でたぬきを見てみると、たぬきと目が合ってしまった。

「あ、その人間！ 僕が視えるの!? ちょっととちょっと、視えるなら助けてなのだ！」 たぬきは情けない声で懇願してくる。

——こういうことがあるから、「視える」って嫌なのだ。

断れない性格の私は大きくため息を吐くと、「何をすればいいわけ？」と腕を組んで小声でたぬきに尋ねた。

「柏の葉っぱを持ってきてなのだ！ 柏の葉っぱがあれば、小さく化けられるのだ。僕、盗み食いをし続けてたらこんなに大きくなっちゃって、この体じゃ不便なのだ……」

自業自得にも程がある！ この食いしん坊たぬきめ。どれだけ盗み食いをしてたら、一メートル四方の吹き抜けに詰まる程の大きさにまで膨張するんだ。

間食の多い私ですら、BMIは標準値を維持してるんだぞ。

呆れつつも、こんなところにたぬきが詰まっていたら天守最上階まで登って景色を楽しむこともできない。私は観光に来たのだ。たぬきごときに邪魔されてたまるか。

仕方なく私は、柏の葉っぱを探しに松本を散策することにした。

一旦松本城を降りて、城下の庭園を探す。

とはいえ、柏の木だなんて見分けがつかない。スマホで検索してなんとか葉の形状などを調べながら木々を見て回るけれど、それらしきものは見当たらなかった。

あちこち探し回って、気がつけばあたりは温泉街になっていた。松本城からは随分と離れてしまっている。

「見つからないなあ、どうしよ」

「間拔けな女にや」

思わず独りごちると、それに返事するように後ろから声が聞こえてきた。

「な、なに？」

振り返ると、駅前で見かけた尻尾しっぽが先割れスプーンのようにになっている猫がいた。

「あ、あの時の中途半端な猫又！」

「誰が中途半端な猫又にや！ わたしは福富ふくとみっていう立派な名前があるにや！」

全体的に白黒色で、足が白い靴下模様になっている猫又は、ぷりぷりと怒りながら私の目の前の塀にひょいと登った。

「柏の葉っぱが欲しいんだらう？ やるから付いてくるにや」

「どうしてそれを……。っていうか、柏の木のありかを知っているの？」

福富と名乗った猫又は、私の質問には答えずすいすいと歩き出してしまふ。そこから五分ほど歩くと、温泉街の中にボツンと、平屋建ての古民家を改装したらしきカフェが現れた。看板には銘木めいぼらしき板に筆文字で『ブックカフェ・玉手箱たまてばこ』と書かれている。

「ここにや」

「え？ 柏の木なんてないじゃない」

あるのは立派な松の木ばかりである。

福富は私を馬鹿にしたように鼻で笑うと、古民家カフェのドアにコンコンと頭突きをした。まるで人間がノックをしているかのようである。

中からバタパタと足音がして、引き戸のドアがガラガラと開かれる。

「はあい。……あら？ 福富？」

現れたのは、長い黒髪をサイドに流して緩く括った、しつとりとした雰囲気の和服美人であった。

「カゲハ、客を連れてきてやったにや。入れるにや」

「あら？ お客さん？」

福富と当たり前のように会話をしているカゲハという女性に、私は驚く。この人、あやかしが視えている上に、喋ることもできるんだ。

「あ、あの、私、柏の葉っぱを探してて。この福富って猫に案内されてきたんですけど……」

「柏の葉っぱが欲しいの？ じゃあ、出すから中に入って」

このお店は柏の葉っぱを常備しているのだろうか？ 変わった店だなあ、と思いいながら、葉っぱが手に入るなら是非もない。

店の中は、随分と懐かしい雰囲気の仕様だった。床は土間になっていて、壁は漆喰で塗り固められている。店内にはいくつもの本棚が設置されていて、文学書から旅行雑誌まで色々取り揃えてあった。

「さあ、そこにかけて。飲み物、何にします？」

「え？ 私は別に……」

カフェでお茶をしに来たわけではないのだけれど。

カゲハさんは戸惑う私に、メニュー表を渡した。

「ほら、柏の葉っぱが要るなら飲み物があつたほうがいいでしょう？」

謎かけのようなその言葉に、疑問符を浮かべながらもメニュー表を眺める。そして、メニュー表の一箇所にある言葉に目をとめた。

「あっ！」

流麗な筆文字で、『柏餅』と書いてある。

「間拔けな女にや。この街には和菓子屋さんなんていっぱいあるのににやあ」
福富はふん、と鼻を鳴らして、私の正面の席に登り丸くなった。

「なんだあ。柏の木を探し回らなくても、柏餅を買えばよかったのかあ……」
なんともいえない徒労感に、脱力して椅子の背もたれに寄りかかる。

カゲハさんはそんな私たちを見て困ったように微笑んで、「歩き回ったのね？ 疲れているでしょう。ゆっくりしてって」と言ってくれた。

「じゃあ、緑茶と柏餅ください」

和菓子にはやっぱり緑茶だろう。なんだか立派な名前がついている銘茶らしきものを頼む。

「はい、かしこまりました。少々お待ちくださいね」

まったく、この数時間はなんだったのか。

あつという間に配膳されてきたお盆の上には、少し茶色がかった柏の葉っぱが艶々と輝いていた。

疲れた体は水分を欲していて、まずは熱いお茶に手をつける。青磁の湯呑み^{ゆのみ}を手に取り、ずず、と一口啜ると、爽やかな苦味が口の中に広がった。これは和菓子によく合いそうだ。

想像すると口の中に唾が湧き上がってきて、私は急くように平たい和菓子の楊枝^{ようじ}を手取る。柏の葉っぱを破れないように丁寧に剥くと、もちもちした皮に楊枝を沈ませた。

「お、おいひいー!」

もちもちの皮に包まれた粒あんは、すつと溶けるように儂い甘さで、しつこさが全くない。

「ふふ、喜んでもらえたみたいで嬉しいわ」

カゲハさんがにこにこ嬉しそうに私を見る。子供みたいにはしゃいだ姿を見られてしまつて恥ずかしい。取り繕うように私はキリリとした顔でカゲハさんの方を向いた。

「甘さが上品で、後味がすっきりしていて美味しいです」

「今更淑女ぶつて食レポしても無駄にや。おいひいーって言つてたにや」

「福富、うるさい!」

横からツツコミを入れてくる福富を睨みつけると、くすくすとカゲハさんが笑う。

「その粒あんは、和三盆^{わさんぼん}っていう日本の伝統的なお砂糖で作っているの。甘さがすつきりしているのが特徴なのよ」

「へえー」

このお店、東京に帰る前にまた来よう、と決める。店の雰囲気もいいし、お菓子も美味ししいし、何より……。

「そういえば、カゲハさんはあやかしが視えるんですね」

なんとなくスルーしていたけれど、猫又の福富と当たり前のように喋っている。

「ええ、そうなの。ここはあやかしや幽霊が集うあやかしカフェなのよ」

あやかしカフェ、とは……。今まで自分の特殊な力を変な目で見られないように必

死で隠してきた私にとって、街中に当たり前のようにあやかしが集^ぐうカフェがあるだなんて信じられなかった。

「あなたみたいに視える人間が来るのは珍しいけれどね。愉快な子たちが集まっているから、よかったらまた来てくださいな」

カゲハさんにそう言われて、なんとなくこのカフェの居心地がいい理由がわかった気がした。この不思議なカフェの中では、私は『変なモノが視える異常者』ではなくて済むからなのだろう。

急いで松本城に戻ると、天守へはもう入城時間ギリギリだった。チケットをもう一度買い、たぬきが詰まっていた二階の階段まで足早に登る。閉城間際なせいとか、あたりに他の観光客はいない。

「はあ……はあ……」

急峻な階段に息を切らしながら登ると、逆さまに詰まったままのたぬきが私を見て目を輝かせた。

「あ！ さっきの視える人間！ 柏の葉っぱ持ってきてくれたのだ？」

「はいはい。あるよ。これ」

柏の葉っぱを差し出すと、たぬきはそれを宝物のように両手で受け取り、自分の頭の上にのつけた。

——ぼん！

間拔けな音を立てて、巨大たぬきが一瞬で私の腰下くらいの体長に変わる。

たぬきは階段を降りると、くんくんと鼻を鳴らした。

「なんか、この葉っぱ甘くて美味しそうな匂いがするのだ……」

「柏餅の葉っぱだもの、そりゃそうでしょ」

「柏餅……。せっかくなら柏餅ごと持ってきてくれたらよかったのに……」

しょんぼりとしながらくうくうとお腹を鳴らすたぬきに呆れ返る。なんて食い意地の張ったたぬきだ。まず葉っぱを持ってきた私に感謝をしろ、感謝を。

「まったくお人好しの人間にゃ」

後ろから呆れたような声が響く。

振り返ると、そこには福富がいた。

「あ！ 福富じゃないか。この人間と知り合いなのだ？」

「さっき柏の葉っぱを探して歩き回ってたから助けてやったにゃ。間拔けな女にゃ」
福富とたぬきは知り合いらしく、私のことを好き勝手に言っている。

そんな二匹を放置して、疲れた私は城を降りて帰ろうとすると、なぜか二匹とも私の後ろをついてきた。

「ちょっと、何？　なんでついてくるの？」

「面白そうだからにや、間抜け女」

「美味しいものが食べられそうだからなのだ、人間！」

「もう！　ふざけないでよ！」

好き勝手に言われて、思わず腰に手を当てて怒る。だけどあやかし二匹はこたえた様子もなく、のんびりと後ろをついてきた。

「あれ？　あずみ？　何やってんだ？」

そこへ、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

振り返ると、そこには天然の色素が薄い髪をした、背の高い青年がいる。一度見たら忘れられないような、透けるように白い肌とよく整った彫刻のような顔。赤みがかった茶色の瞳は、鋭く人を射抜く。大学時代の同級生、山本翔吾やまもと しょうごがそこにいた。

「山本君!?　どうしてこんなところに」

「それはこっちのセリフ。俺は仕事の下見で来ててさ。それよりあずみは？」

「……旅行」

「へえ、いいじゃん」

婚約者に浮気されての傷心旅行だけどね、と心の中で呟つぶやく。

「間抜け女、お前、あずみっていうんだにや」

「もう、間抜け女はやめ……あつ」

思わず福富に返答しかけて、山本君の前であることに気づく。またやってしまった人前であやかしと喋ってしまったえば、変な人だと思われるしまう。

「あずみ、お前も視えんの？」

「え？」

固まった私に、山本君は福富とたぬきを指差した。

「いや、だってこいつら……」

「ちょっと待って、ちょっと待って。……もしかして、山本君も？」

まさか、山本君も視える人なの？

今日一日で、二人も視える人と遭遇するなんて。とんでもない偶然だ。

私たちは混乱しながらも、一旦落ち着けるところで話し合おうと、駅前にある個室の居酒屋へ行くことにした。

四人席で腰を落ち着けた私たちの隣には、なぜかたぬきと福富もいる。適当に注文をして、お腹を鳴らしながら食べ物への期待に目を輝かせているたぬきに、私はため息をつきつつも苦手な梅干しの使われているお通しを押し付けた。

「まさかあずみも視える人だったとはなあ……。大学のゼミじゃ、そんな様子微塵もなかったけど」

「ああ、うん。大学時代は一時的に視えなくなってたから」

「一時的に？ そんなことあるのか？」

私は、大学に入學してからすぐに付き合ひ始めた康平といた間は視えなかったこと、先日別れてから不思議とまた視えるようになったことを話して聞かせた。

「へえ、不思議だな」

山本君の言葉に、福富が訳知り顔で口を開く。

「そりゃ、その男の精力が強すぎたせいで幽霊もあやかしも近寄ってこなくなっていたんだろうにゃ。たまにシモの生命力が強すぎて、あの世のものが近寄れない人間はいるにゃ」

「ええ!? そういうことだったの？」

まさか、康平の精力が旺盛すぎたせいであやかしも近寄ってこなかったのが原因とは。

「それほどシモのエネルギーが強い男なら、きつと付き合っていた間ずっと浮気されてたにゃ。お前が鈍くて気づかなかっただけにゃ。そんな男のことはさっさと忘れるに限るにゃ」

「うっ……」

福富は容赦なくグサグサと私を刺してくる。けれど、言っていることはその通りで、実際、忘れるしかないのだろう。

そんな浮気性の男のことをいつまでも引きずっている方が馬鹿らしいかもしれない。福富の言う通り、私は飲んで食べて全てを忘れようと、ぐいと日本酒を呷った。

「……それさあ！ 家に帰ったらさあ！ 康平と知らない女がわらしのベッドの上にいたの！」

山本君は意外にも相槌を打つのが上手く、私はぐびぐびと日本酒を飲みながらあーだこーだと愚痴を言っているうちに、強かに酔っていた。

「それで、仕事も辞めて松本へ傷心旅行に来てたのか」

「そうなの！ もう、そしたら知らないあやかしに絡まれるし、たぬきは詰まってい

るし、踏んだり蹴ったりよ！」

どん！とおちよを机に置いて、私は吠える。

「れも、山本君に会えてよかったあ。同じ視える人がこんなに近くにいたなんて……」

私がそう呟くと福富が私の手を尻尾でてし、と叩いた。

「こいつは人じゃないけどにや。……鈍い女にや」

「え？ 福富、なんか言った……？」

うとうと、福富が言っている声が遠くに聞こえながら、お酒でぼうつとした意識は徐々に遠くなっていた。

「山本君、ごめん！」

昨日の夜、宿に送ってもらったらしき記憶がうつすらと残っている私は、SNSで山本君へ久しぶりにメッセージを送る。平身低頭謝っているスタンプと一緒に、「今度何か奢ります」と申し添えて。

二泊三日の旅行も今日で最終日である。旅館をチェックアウトした私は、駅のコインロッカーに荷物を預けて、カゲハさんへ挨拶へ行こうとバスに飛び乗った。福富とたぬきも一緒である。

「柏餅っ、柏餅っ」

たぬきは柏餅を楽しむにニコニコしながら足をばたつかせている。

温泉街のバス停で降りると、急峻な坂道を登った先に『ブックカフェ・玉手箱』はある。色ガラスの嵌められた綺麗な引き戸を開ければ、藤色の着物に身を包んだカゲハさんが笑顔で迎えてくれた。

「ああ、こんにちは、昨日の……」

「嬉野あずみと言います。昨日はお世話になりました」

「いえいえ。あ、その子が柏の葉っぱを必要としていたたぬきちゃん？」

「そうです」

たぬきは背を伸ばしてくんくんと鼻を鳴らしている。このカフェの中には、あんこの甘い香りが漂っていた。

「ちょうど粒あんを炊いているところなのよ。たぬきちゃんは随分と食いしん坊みたね」

くすくす、とカゲハさんが笑う。

「本当に。柏餅が食べたい食べたいって騒いで、大変だったんですから」

「じゃあ、たぬきちゃんは柏餅ね。あずみちゃんはどうします？」

そう問われて、メニュー表を覗き込む。

このラインナップがまた食べたいものだらけで悩ましかった。

王道の抹茶あんみつに、わらび餅、みずようかん水羊羹。

洋菓子系だとチーズケーキやプリンに、クランベツトという見慣れないパンケーキのようなものもあるみたいだ。

軽食系も充実している。

悩みに悩んだ末、抹茶あんみつで一服することにした。飲み物は、玉手箱ブレンドという珈琲コーヒーにする。

運ばれてきた珈琲とあんみつは、流麗な曲線を描く琉球ガラスりゅうきゅうの器に漆のお盆にのせられて、その趣味の良さからして期待も高まる。

珈琲はやや深煎りでコクがあり、和菓子系統のもつたりとした甘さにもよく合うように淹れられている。

あんみつはプレーンな白玉と抹茶味らしき緑の白玉、透明な寒天のコントラストが美しい。その上に緩めに作られた粒あんがとろんとかけられて、抹茶アイスのつかっている。

甘さが調節できるようにか、別の容器で添えられた黒蜜を、たっぷり絡めていた

だ。

ぷるぷるとした白玉に、粒あんと黒蜜の濃厚な甘味がよく絡んで、それを抹茶アイスの冷たさがするりと押し流していく。

はあ、美味しい。

口の中に冷たさと甘味が滞留し始めると、珈琲を飲んで一服。これがまた最高の相性だった。

「じゅる……」

横からたぬきが私のあんみつを覗き込んでいた。見ると柏餅はすでに食べ尽くさされていて、柏の葉っぱのみがてろりと皿の上にのっている状態だった。

「はあ……、一口食べる?」

「うん!」

そう言うと、たぬきはガクガクと首を縦に振って、身を乗り出してきた。

「ちよっと、一口だけだからね!」

抹茶アイスと粒あんと白玉を、珈琲に付いてきて余ったスプーンの上にのせ、たぬきの口元へ運ぶ。たぬきはぱくんと一口でそれを食べると、目を細めて幸せそうに蕩けた顔をした。

「まったく、あずみはお人好しにや。……で、カゲハ、こいつどうかにや？」
平皿に注がれたミルクを舐めていた福富が、てしてしと尻尾で床を叩きながら言う。
何事か問いかけられたカゲハさんは、頬に手を添えて小首を傾げた。

「うーん、素敵な子だと思っけれど……」

「こいつ、同棲していた職場の婚約者に浮気されて、辞職して、職なし家なし彼氏なしの哀れな女にや。拾ってやるといいにや」

突然暴露を始めた福富に、ギョツとする。

「ちょっと、何言ってるの福富！」

「カゲハはこのカフェで働いてくれる人手を探してたにや。このカフェで働くなら視える必要があるけど、そんな人間はなかなか希少だからにや。あずみにはちょうどいいと思って紹介してやったにや」

人の秘密をとんでもない勢いで暴露した福富は、どや顔でツンと鼻先を上に向けた。
「カフェ店員って……。アラサーにもなつてバイトはきついでしょ」

カゲハさんの手前言いづらい話ではあったが、実際問題私はもう二十八歳だ。この年でカフェのアルバイトはさすがにちょっと問題があると思ってしまう。

「あら、正社員扱いにはできるわよ。それに、奥の離れに住んでもらうこともできる

し、家賃はいらないわ」

「え……」

カゲハさんの言葉に、少し揺らぐ。家賃がタダ、というのは大きい。松本の街自体は気に入っているし、この街に住むのも悪くないと思っではいたけれど……。

「それに、お給料もこれくらいは用意できるわ」

そう言って提示された額は、前職の給与と大差ないものだった。

これで家賃タダなら、毎月二桁万円は貯蓄に回せてしまう。

「ちょ、ちょっと考えさせてください」

すぐに断るにはあまりに良すぎる条件。とはいえ東京から長野への引越し、それもカフェで住み込みの仕事へ転職だなんて、すぐに決心するには大きな決断すぎる。

「視える人間には、視える人間にしかできない仕事もあると思うの。よかったら考えてみてね」

そう言われて私は言葉に詰まる。

視える私には居場所がなかった。そんな私にしかできない仕事があるなんて、考えたこともなかった。急にそんなことを言われても、上手く返せる言葉を私は持たない。私は戸惑いながら、カゲハさんにペコペコと頭を下げて逃げるように玉手箱をあ

にした。

「なんで即決しないにや？ いい条件だにや」

足早に歩く私の後ろを走ってついてくる福富に、私は怒ってみせた。

「急にそんなこと言われても決められないよ！ それに、私の事情をペラペラと喋ったりして……もう！」

福富は私を追い越すと、振り返って足を止めた。瞳孔が縦に割れた黄金色の瞳が、陽光を反射して光っている。

「事実を言ったまでにや。お前みたいな力を持つ人間に、人間の普通の仕事は厳しかろうにや？ 人間の世界とあやかしの世界の間にいる、お前が生きられる狭間の空間は、矢狭間くらい狭いにや」

その声は、容赦なく私の耳を抉った。

ヒソヒソと囁き合いながら、不気味そうに私を見てきた学生時代の同級生たちを思い出す。実の親ですら、こんな私を理解しかねたように距離を置いていたのだ。

「わたし、は……」

言葉に詰まって立ち尽くす私の手を、たぬきが引つ張った。

「あずみい、僕、お腹すいた」

ぐううう、と巨大な音を立ててたぬきのお腹が鳴る。

ふ、と力が抜ける。

「わかった、わかった。この話は後にして、ご飯にしょ」

あやかしたちとお昼ご飯を食べた後に別れ、私は特急へ乗った。松本へ来る時は怒りと悲しみでぐちゃぐちゃだったのに、今はそれほど悪い気分ではない。

転職の件は悩ましいけれど、松本でのことを振り返ると、階段に詰まっていた間拔けたたぬきの絵面や、偉そうな福富の顔を思い出してぐすり笑ってしまう。

アラサーがカフェ勤めという社会的なアレコレを抜きにすれば、彼らに囲まれて暮らすのは悪くない選択肢のようにも思えた。

何より、カゲハさんの言葉、「視える人間にしかできない仕事もある」というのが私の心に残っていた。それに、福富の言っていたこともあながち的外れではない。普通の人間ではなく、さりとてあやかしでもない私の居場所は、きつと世界中どこを探したってほとんど見つからないのだろう。その数少ない居場所が、あの玉手箱にはあるというのなら、賭けに出たっていいのかもしれない。

重たいキャリアケースを引いてマンスリーマンションに帰り着く頃には、もう夕方

になっていた。この部屋の契約更新日までには、身の振り方を考えておかなければいけない。

備え付けの固いベッドに腰掛け、ため息を吐く。東京にあやかしは少ない。その代わり、虚な表情をした幽霊がたくさんいる。駅からの短い帰り道の最中でさえ、何体もすれ違った幽霊の顔を思い出してうんざりした気分になる。

また視えるようになってしまったこの体で、東京で暮らしていくことを考えるとそれはそれで憂鬱だ。

自分の未来を考えて鬱々していると、不意に部屋のチャイムが鳴った。

同棲していた家を飛び出してからさほど時間も経っていない。この家を訪ねてくる人などいないだろうに、一体誰だろうか。

そう思いながらドアスコープを覗き込むと、そこには思い出しくもない元婚約者の姿があった。

出たくなってそのまま居留守を使っていると、何度もピンポンと鳴らされる。

「いるんだろ？ あずみ、出てくれよ」

挙句に声まで上げ始めたのだから、壁の薄いマンスリーマンションのこと、近所の人に何事かと思われてしまう。

洪々ドアを開けると、康平がほっとしたように私を見た。玄関先にいた鼠のあやかしが、康平を見るなりビヤツと声を上げて走り去っていく。

「なんでこの家を知ってるわけ？」

私は冷たく尋ねる。

「お前のお母さんに連絡して、聞いたんだ。あずみ、謝らせてくれ。あれは本当に、なんていうか」

母は勝手に康平に私の居場所を教えたのか。うんざりしながら、玄関に上がり込んでこようとする康平の胸を押し返す。

「もういいってば。話し合うことなんて何もないし、もう終わったことだから」

「いや、そんなこと言うなって。俺たち、結婚の約束した仲じゃないか」

今更それを持ち出すのか！

結婚の約束をした仲なのに、同棲している部屋に他の女を連れ込んだのは誰だと言いたい。

それに……。福富に聞いた言葉が頭をよぎる。

「今回のことだけじゃない。……知ってるよ、康平が今までずっと浮気してたこと」

「な、なんで……」

鎌をかけると、案の定康平はギョツとした顔をした。

「康平がそういう人だったのも含めて、私にはこの先付き合っていくのは無理。もう帰って」

「あずみ！ 待ってくれ、なあ！」

乱暴にドアを閉めて、玄関先に座り込む。康平はしばらくマンシヨンの外廊下で粘っていたけれど、十分もすると帰っていった。それと同時に、鼠のあやかしがこの隙間から入り込んだのか戻ってくる。

それを見るときなしに視ながら、私は呟いた。

「さよなら、『普通の女の子』の私……」

第二章 「あやかしの街」

翌朝私は、引越しの手配でてんでこ舞だった。

昨日、康平に引導を渡したことで覚悟が決まったのだ。「視える人」である私には、視えるなりの生き方があるのかもしれない。心のどこかにあった、康平と過ごしている間の視えない普通の人間としての自分に対する未練が、断ち切られたのだ。

マンスリーマンシヨンの契約は再来週には切れる。それまでに業者を手配して、長野へ引越すことにした。

カゲハさんの連絡先は知らなかったから、『ブックカフェ・玉手箱』の公式ホームページから電話番号を調べ、連絡する。

離れに住み込みで働きたいと申し出ると、カゲハさんは手放しで歓迎してくれた。前職の貯金だっていつまでも保つわけではない。この際住み込みでの働き口があるなら働いて、貯金をしながらゆつくり将来のことを考えるのもいいだろう。

部屋を片付けようと見回すと、マンスリーマンシヨンに越してきてから段ボールに

入れっぱなしの荷物と、コンビ二弁当のゴミばかりが部屋にあった。

突発的に旅行へ行こうと思ひ立つまで、この部屋でどう過ごしていたのか、いま思い出せない。少なくともろくな生活じゃなかったのはお弁当のプラスチック容器を見れば窺い知れた。

「はあ、いい年して情けな……」

彼氏とうまくいかなかったくらいで、生活がガタガタになって、後先考えず仕事も辞めてしまったのを今更ながらに情けなく思う。でも、そのおかげでいい出会いもあったのだ。これからは未来のことを考えて生活を立て直そうと気を取り直し、引越しの手続きを進めていった。

マンスリーマンションの契約満了日、引越し業者が来て数少ない荷物を回収していく。それを見守り終えたら、特急あずさで新宿から松本まで一直線だ。

あの旅行に出かけた日とは違う、まささらな気持ちで特急の座席に座る。生意気な猫又も、食いしん坊のためきも、久々に会えると思うと楽しみで口元が自然と綻ぶ。

窓の外の景色は灰色のビル群から次第に緑が濃くなっていて、人の領域は山と山の隙間にあるわずかな空間へと変わっていく。

それを眺めていると、ふと無意識に肩に入っていた力が緩んだ。私を奇異の目で見

るのはいつだって人間だから、かな。人の少ない場所こそ、私は人でいられる。

数時間に及ぶ移動の間、本を読んだりうとうとしたりしながら過ごして、私はついに松本へとたどり着いた。

「あずみちゃん！ いらっしやい！ 来てくれて嬉しいわ」

玉手箱にたどり着くと、カゲハさんが満面の笑みで出迎えてくれた。

引越し業者さんはまだ来ていないようだ。間に合ってよかった。

「先に離れに案内するわね。こっちへいらっしやい」

カゲハさんと一緒に玉手箱の本体となっている表の古民家を出て、飛び石に沿って裏手に回る。そこには、平屋建てのこぢんまりとした日本家屋があった。

「トイレは付いているけど、お風呂はごめんなさい、徒歩二分のところに温泉があるからそこで入ってね。キッチンも玉手箱にあるから、何か作りたいものがあつたら自由に来て使って。大抵の営業日は残り物が賄いになるから、自分で食事を用意する必要はあまりないと思うけれど」

さすがに家賃タダで住み込みの仕事、全てが都合よく完璧というわけではない。カゲハさんから事前に伝えられていた通り、お風呂とキッチンはなし。お風呂がなしでその代わり徒歩二分の温泉に毎日入れるというのは、私的にはアリ寄りのアリだけ

れど。

それに賭いがつくというのも嬉しい。家賃がタダで食費もほぼタダ同然。一体月にいくら貯金できるのか、考えると口元がにやけてしまう。

離れの中を少し覗き込む。入って左手側は縁側付きの和室になっていて、真ん中には囲炉裏がある。天井の梁からは自在鉤が吊り下げられていて、もうまるで時代劇の世界だ。

右手は板の間になっていて、その奥がトイレ。一人暮らしするには十分な広さだ。

「今日は休業日だから、引越し業者さんが来るまでの間に仕事を教えちゃうわね」

そう言われた瞬間、私のお腹がくう、と鳴った。

「あら、ふふ。でもその前に、お昼ご飯にしちゃいましようか」

時刻は午後二時。東京からの移動があったから、お昼ご飯は食べていない。

玉手箱に入ると、この店に居着くことにしたのか、頭に柏の葉っぱをのせたたぬきが、柏餅をもちもち食べながらソファ席でくつろいでいた。

「あ、あの時のたぬき！ あんたカゲハさんに迷惑かけてないでしょうね」

「大丈夫だよ。カゲハは僕にもたくさんおやつくれるから、大好きなのだ」

「もうっ！」

たぬきを叱り飛ばしていると、厨房で賭いを用意してくれていたカゲハさんがひよこつと顔を出した。

「ああ、たぬきちゃんには私が言って居着いてもらったの。ほら、あずみちゃんベツドもお布団もないって言ってたでしょう？」

「え、はい。こつち来てから布団を買おうと思ってたんですけど。あ、でも離れの畳のお部屋は囲炉裏が真ん中にあるってお布団敷けないかな？ 板の間用にベッド買わなきゃ」

私がそう言うと、カゲハさんは「だったら……」とたぬきを指差した。

「だから、巨大化したたぬきちゃんを布団にすればあったかいんじゃないかと思って」「たぬきを!？」

その発想はなかった。

「お布団バイト代としてお菓子くれるなら、いくらでもやるのだ」

布団呼ばわりされたたぬきは、のんびり柏餅を齧りながら答える。

確かにたぬきの毛はふわふわであったかいし、食いしん坊だけあってお腹はもちもちしていて寝心地もよさそうだ。私の脳裏を、小さい頃見たアニメ映画が横切る。『トトロ』という楠に住む巨大な妖精のお腹の上で、主人公の妹がお昼寝をしているシー

ンが印象的だった。

まだ肌寒い三月のこと、ふかふかもちもちの巨大たぬきのお腹で眠ったら、どれほどあったかいだろう。

「た、確かに、悪くないかも……」

私があやかしのお腹の上で寝るといふ非常識なアイデアにぐらついていると、カゲハさんが厨房から出てきた。

「はい、お待ちどう様。今日の賄いはほうれん草とグアンチャーレのクリームパスタよ」

「わっ！ いい匂い！ ありがとうございます」

以前玉手箱に来た時、軽食のメニューもあって食べるのを楽しみにしていたのだ。もったりとしたクリームがいかに濃厚そうで、それをパスタの麺にたっぷり絡めていただく。

「そういえば、グアンチャーレってなんですか？」

「豚の頬肉の塩漬けのことよ。パンチエッタに似ているけれど、それよりも脂身が多くてまろやかだし、焼くとカリカリしてて美味しいの」

グアンチャーレは、よくきいた塩気にハーブの風味がほんのりと香って、カリカリとした食感が最高だった。

散らされたほうれん草もこつてりとしたソースに一種の清涼感を与えている。

「ふはあ、美味しい」

「あずみちゃんは本当に幸せそうに食べるわねえ」

カゲハさんはこにこしながらこちらを見ている。

「え、恥ずかしい。そんな顔してましたか私」

「うふふ、美味しくて幸せって顔、してたわよ」

「やだあ」

そんな食いしん坊な顔を見られていただなんて、恥ずかしくて顔が熱くなってしまう。

「カゲハあ、僕の間も！ 僕の間も！」

すっかり柏餅を食べ切ったたぬきが、足をバタバタとさせてねだる。

「はいはい。用意してあるわよ」

「カゲハさん、このたぬき、あんまり甘やかさない方がいいですよ。盗み食いの常習犯なんだから」

「まあまあ」

たぬきをこの店に連れてきてしまった責任もあり、盗み食いしないように目を光ら

せておく。だけど肝心のカゲハさんはすっかりたぬきを可愛がっていて、甘やかしているようだ。

わやわやと騒ぎながらクリームパスタを食べていると、玄関の方から「ごめんくださーい。牛乳の配達ですよー!」という声がかかった。

「はい、ただいま」

カゲハさんはばたばたと駆けて行って、入り口の扉を開ける。そこにいたのは、ツナギに身を包んだ人面牛だった。

「牛!？」

私が驚いていると、人面牛はこちらに視線を向ける。

「おや、俺の真の姿が視える人間かい？　こりゃ珍しい」

「新しくうちで働いてくれることになったあずみちゃんって言うの。あずみちゃん、こちらは件さん。人面牛のあやかしよ」

「あやかし……」

牛のあやかしがツナギを着て牛乳の配達？と、私が目を白黒させていると、カゲハさんは件さんについて詳しく説明してくれた。

「件さんは普段人間に化けて安曇野で牧場を経営しているの。牛とのコミュニケーション

ション能力を活かして、ね」

「……牛とのコミュ力……ですか」

玉手箱はあやかしの集まるカフェだと聞いていたが、仕入れ先まであやかしたとは。「件さんの牧場の牛たちは体調管理が完璧だから、牛乳もすごく新鮮で美味しいのよ」カゲハさんは、箱の中に所狭しと詰め込まれた牛乳のバックを一本とって、「味見してみる？」と私に差し出した。

そこまで言われたら、普通の牛乳とどう違うのか、飲んでみたい気もする。

私が頷くと、カゲハさんは厨房からコップを二つ、出してきた。私の分と、たぬきの分だ。

トットと音を立てて注がれた牛乳は、真っ白で一見なんの変哲もない。だけど、一口、口に含んだら普通の牛乳との違いは瞭然だった。

甘い。

砂糖など含まれていないはずなのに、自然な甘さが舌の上に広がる。次に来るのは乳脂肪分のまろやかさで、しつこくないのにコクがある。

「うちの低温殺菌だからねえ。風味が生きたるんだよ。ヨーグルトやチーズも作つとるでね、たくさん食べてくれ」

件さんは嬉しそうに解説してくれる。低温殺菌というのが他の牛乳と比べてどう違うのか、詳しくない私にはいまいちわからないけれど、きっと何か特別な製法なのだろう。その牛乳がこれほど美味しいのだから、ヨーグルトやチーズはいかほどか。私はすっかり件さんの牛乳に魅了されてしまった。

「そのクリームパスタも件さんの牧場の生クリームで作っているのよ。コクがあつて美味しかったでしょう」

「へえ、そうなんです。確かに、普通のクリームパスタより濃厚で美味しかったです」カゲハさんの料理スキルが高いからだとも思ってたけれど、材料にもこだわっているからこそこんなに美味しい食事が出せるのだな。

それだけこだわった料理を出していて、キッチンもホールもレジも一人でやっていたなら、確かに人を雇いたくもなるだろう。でも視える人でなければ働けない環境だから、人手が集まらず苦労していたんだろうな、と改めて思う。

こんな私がしつかり必要とされる環境があつて、少し嬉しい。

クリームパスタを食べ終えた私は、件さんが牛乳を店に運ぶの手伝う。一方たぬきは、牛乳のおかわりを要求した挙句、蜂蜜を入れて飲んでた。

「たーぬーきい！ ちょっとは手伝いなさい！」

カゲハさんはたぬきに甘いけれど、私は甘やかさないんだからね！と決意を込めてたぬきのお尻を叩く。この店に住むなら、しつかり家賃分は働いてもらわないと。

牛乳を片付けたら、カゲハさんに仕事を教わって過ごす。注文の取り方、レジの打ち方、古民家の手入れのコツまで、一通りメモをとったところで、店の前から大きなエンジン音が聞こえてきた。窓ガラス越しに、引越し業者のトラックが見える。

「あ、業者さん」

「ちょうどキリがいいから、あずみちゃん、行つてらっしゃい」

「はい、ありがとうございます」

表に出て、業者さんを出迎えると、離れに案内する。荷物はそんなに多くないから、大して時間はかからないはずだ。

板の間に衣装ケースやパソコンデスクなどを運び込んでもらい、細々した段ボールは畳の上に積み上げる。

水回りには洗濯機を設置するスペースもあったけれど、同棲していた家に置いてきてしまった。私のお金で買ったものなのに悔しいけれど、もうあの家には戻りたくない。やむをえず、後日松本の家電量販店で購入することにした。

業者さんが去った後、開梱作業を進めて、夕食代わりにカゲハさんが玄関先に置い

てくれたおにぎりを食べ終えると、気がつけば日が暮れていた。

「お風呂、行かなきゃ……」

タオルと着替えを持って、カゲハさんから聞いていたすぐ近くの温泉へ向かう。浅間温泉にある日帰りの入浴施設。露天風呂にサウナと水風呂までついているというそこに行くのを、私は楽しみにしていた。

どうせ毎日来るのだからと十枚綴りの回数券を購入して、受付を済ませるとさっそく浴場へ入る。先日の旅館と違い、風情よりも設備の豊かさを重視したような、スーパー銭湯形式の温泉だ。

全身を洗っていざ温泉に浸かると、開梱作業で凝り固まった体がゆったりとほぐれていく。

「ふわあ、いい気持ちなのだあ」

「って、ちよつとたぬき!? あんたなんで付いてきてるの! ここ、女湯なんだけど」
気がつけば頭に葉っぱとタオルをのせたたぬきが、隣でくつろいでいた。

「あやかしの男も女も関係ないのだ。それに、僕を布団にして寝るなら、洗い立てのほうがいいのだ?」

「うぐっ。確かにそうかも……」

たぬきの毛からは、この温泉に備え付けられているシャンプーの香りがほんのりと漂っている。洗い立てふわふわの毛に埋まって寝るのは確かに気持ちよさそうだ。

「今日のお布団代は、いちご牛乳で!」

「はあ……。わかったわかった」

温泉から出たら、たぬきをドライヤーで念入りに乾かし、脱衣所に置いてある自販機でいちご牛乳を買う。すっきりわがまたたぬきに振り回されているけれど、これもベッドを手に入れるためだと思えば仕方ない。

温まった体に爽やかな夜風を浴びながら離れに戻ると、さっそく私はたぬきの頭から柏の葉を奪い取った。

「ほん!と音がして、たぬきが巨大化する。」

「じゃ、おやすみなさーい」

「むむ。気が早いなあ。しょうがないのだ、おやすみあずみい」

たぬきによじ登って、そのお腹の上にゴロンと寝転がる。ふわふわの毛からはほんのりとシトラスの香りがして、もちもちとしたお腹の柔らかさは極上。たぬきの呼吸に合わせてゆっくりと上下するのもまた、眠気を誘う。

——あれ、私、お酒飲まずに寝付けるの何気に久しぶりかも……。

康平の件があつてから、夜はお酒を飲んで酔いに任せてなんとか寝ていた。そうじゃないと、ベッドの上でぐるぐると余計なことを考えてしまうから。

だけどたぬきのあつたかさ^{かさ}に包まれて、その呼吸音を聞きながらだと、お酒の力がなくても自然と眠気が訪れる。一人ではないというのが大きいのかもしれない。カゲハさんは、それも見越してたぬきにお布団役を依頼したのだろうか。

——不思議な人だなあ……、カゲハさん。

形のいい瞳はいつも穏やかに細められているけれど、その目で見つめられるとなぜか全てを見透かされているような気分になる。

ほんやりと、カゲハさんのことやお店のことを考えているうちに、私の意識は柔らかな眠りへと落ちていった。

早朝、障子の隙間から差し込んでくる日差しでばつちりと目が覚める。なんという健康的な朝だろう。たぬきのお腹の上から降りて思い切り伸びをすると、外からは小鳥の囀り^{さえずり}が聞こえてくる。

「んんう……、あずみ、おはよう……」

たぬきはまだ眠いのか、短い前足で目を擦^{こす}っていた。

立ち読みサンプル はここまで

「おはよ。さ、今日から仕事開始だ。たぬき、ちょっと邪魔だから小さくなって」

「はい」

柏の葉っぱを渡すと、たぬきは、ぼん！と音を立てて小さくなる。二度寝を決め込むたぬきをよそに、広々と使えるようになった部屋で、私は身支度を整えた。

制服は、着付けができない私のために上下セパレートになったものをカゲハさんが用意してくれた。上衣は矢絛模様の小袖で、前掛けは葡萄茶色。大正時代の女学生をイメージしたデザインだ。下衣も葡萄茶色の作務衣風ズボンになっているから、とても動きやすい。

一人で簡単に着替えることもできるし、店の雰囲気損ねないデザインでありがたい。

店は朝七時半からモーニングもやっているから、仕込みの時間も含めて早朝から働くことになる。表に出ると、カゲハさんはすでに厨房で作業を開始していた。

「おはようございまーす！」

「おはよう、あずみちゃん。初日から早くてごめんなさいね。あ、朝ごはん、モーニングセットでいいかしら」

「あ、普段朝は食べないんですけど……」